

諸國獵人譚

戶川幸夫

譚人獵國諸

芥川幸夫

春秋藝文社

譚人獵國諸



昭和三十四年五月二十五日發行

定價 二九〇圓

著者 戸川幸夫

發行者 車谷弘

印刷者 長久保慶一

發行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

萬一落丁亂丁の際は、お買求めの書店
又は發行所にてお取り換え致します

印刷 大日本印刷
製本 加藤製本

諸國獵人譚

目次

夜這いの辰	5
連れだし清兵衛	51
腹切り源造	97
おしやれ正太郎	145
怒ぎの弥八	187
じんばり英坎	235
だまされ双六	281
どうこく雄作	319

裝釘難波田龍起

夜 這いの辰

夜這いの辰こと熊切辰次が僕を最初に訪ねてきたのは、僕が二十年賞与を貰ったばかりの時だったから、確か四、五年ほど前になる。

受付嬢はその珍妙な姓名——というよりも普通の人とはかなりかけ離れた変った印象に面喰らったらしかった。

九月の、まだ残暑の酷しい折で、上着なしの開襟シャツ組が多い中を、辰次はニッカーズぼんに、ジャンパーを着て古ぼけたチロル・ハットをかぶったまま、のっそりと近代的にみがき立てられた会社玄関の受付口に立ったのである。

土建屋かと最初は見えた。陽に灼けた皮膚、顎には無精つたらしく伸ばした鬚、そして身の丈は五尺そこそこでがっしりとした身体つきだったからで、しかしそれも直ぐに間違っていたことが判った。

辰次は極めて訛りのひどい、聞きとれないほどの山形小国^{やまがた}弁で

「大熊さんに会いきたんだがよス。俺、熊切辰次つう者だがなや」

と早口に喋った。

「はあ？」

受付嬢は眼をバチクリして聞き直した。二度目は最初より早口だった。三度訊ねることの非礼を思つて受付嬢は面会票を差出して

「恐れ入りますが、このところにお名前を……それからここに面会される方の……」
と説明した。

辰次はギョロツとその大きな眼玉を光らせると野鄙な姿には似合わぬ達筆で被面会者——大熊堅太郎君、訪問者——熊切辰次、と書いた。

受付嬢は職業的に受話器を取り上げて、

「もしもし営業第一部の大熊さんに……」

と云いかけてぶつと吹き出し、その非礼に気づいて苦し気に笑いを押え、

「大熊さんに熊切さんが面会でございます」

と辛うじて伝えた。

その時、僕は資料部から調査資料を持ち出して調べものをしていたところだったが、見習社員の人から

「熊切さんという方が面会です」

といわれても、最初のうちは一寸ピンと来なかった。

熊切といえば、もう二十年になるだろうか——山形県飯豊山いひでの南小国村で知り合った猟師にそんな

名の者がいたが、あれ以来、音信不通だし、それかといってそれ以外には思い当らなかつた。

「はてね、ちょっと貸してごらん」

僕は見習社員から受話器を受けとると

「どちらの熊切さんだね？」

と訊ねた。

受話器の向うで二、三喋る声をして

「シヤマガタの方だとおっしゃっています」

「シヤマガタ？ 山形だろう」

「とにかく訛りの強い方なので……」

「電話に出て貰ってくれないか」

するとがら声を取って代った。

「ああ、もスもス。大ぐまさんだかシ、俺、熊切よス」

「熊切——という……あの小国の……」

「ンだ。ンだ。飯豊の辰次よ。夜這いの辰つあんだスヤ」

ああ、やっぱりそうだったか、まだ生きていたんだ。懐しさがぐうっとこみ上げてくると

「なんだア、ほうかア。東京サ、いつ来たんだア？」

二十年ぶりに僕も下手な山形弁が出た。

「昨日よッ、昨日。小国から材木運んでよ。トラックひっ張って来たんだア」

「よし、今いぐ。待つててける」

僕はふた昔まえの学生になつてあたふたと玄関に走つた。

よく僕がこのK産業に働いてることを知つたもんだ。エレベーターの下るのがいつもより遅いようにすら覺えた。

玄関に降りてみると、辰次は来客用の椅子にも掛けずに、三人の受付嬢の顔を立つたまま臆面もなく真正面からまじまじと見据えていた。その様子は雪庇ゆづかりの上で勢子に追われて上つてくる獲物を見張つている時と同じように、僕に二十年前の記憶を鮮かに甦らせてくれた。

「やあ、暫く——」

と僕は彼の背後から声をかけた。

「よくここが分つたねえ」

顔を合せてみるとやっぱ僕は東京の人間だった。下手な山形弁は引っ込んでしまった。

辰次は左の毗かみから唇にかけてうっすらと残っている熊の爪痕と、その鋭い眼のきらめきを除いてはすつかり二十年前の彼と異つていた。

野獣のような精悍さの代りに、豊富な体験と自信から身についたどっしりとした貫禄が備わっていた。くたびれたチロル・ハットの下から覗いている五分刈りの髪にも銀色の毛がかなり混つていた。

二十年の歳月がやはりこんなところを翳を見せていた。

「やっぱり東京の大会社だなシ、いい女子おんなば置いてッことよス」

辰次が僕の顔を見たとたんに云つた言葉はこれだった。

「辰さん、相変らずだね。雀百まで踊りを忘れずか、ハハハ……」

と僕は笑った。どこの会社でも受付嬢にはよい娘を置いている。わが社でもそうだったに違いないが、慣れてしまうとそう感じなくなっていただけで、辰次に云われて、ほんとにそういえば三人とも美人だな、と見直したのであった。

ちようど昼飯時であった。僕は辰次と一緒に食事することにして、何がいいね、と訊ねた。

「何だっがいいス。山の猟師は何だっ喰うから……」

僕は彼の嗜好を思い出そうとしたが、思い出せなかった。そこで有楽町の駅に近い喰べ物横丁の、とある天ぶら屋に連れていった。

昼ではあったが遠来の客の為に僕はビールを注文した。

ビールがくると

「俺は駄目だス」

と辰次はごつい手でコップに蓋をした。

「そうだったけか？ 昔は呑んだんでなかったかな」

「昔からよス……アルコールは一滴も駄目なんだ」

「あの方だけだったっけかなア。酔って熊突き槍もって村中を暴れ回ってたのを憶えてるような気がするが……」

やはり二十年の歳月は僕の記憶をいろいろにふみ迷わせているらしかった。

「ところでどうして分ったね、僕の居所が……」

仕方なく僕は自分のコップにだけビールを注ぎながら訊ねた。

「木村さんサ聞いたのよス」

「なるほど……そうか」

木村英吉というのは僕が山形に居た頃の友人で、確か僕より七つか、八つ年上の筈だった。

当時、僕はそこの高等学校の生徒だったが、クラスの者よりも町の人や山の人々と数多くつき合っていて、木村もその一人だった。

その頃、木村は山形市内で大きなパン屋を経営していた。僕が東京に帰るのと前後して彼もパン屋を廃業し、畜産業を見習うために北海道に渡った。現在は米沢市の郊外でささやかな牧場をやっている。

その木村が二、三年前に東京に出てきたことがあった。彼とは文通を続けていたので、早速僕を訪ねてきた。その晩は銀座を二人して呑み歩いた。酔えば二十年の昔に戻って懐旧の花を咲かせたのであった。

「それはそうと、あの獺師はどうしたろうな」

と僕は木村に訊ねた。

「夜這いの辰か？」

「ンだ、夜這いだ、夜這いの辰だちゃ」

「相変わらず夜這いしてンべ。何しろ稀代の好き者だからなシ。

去年の盆によう、俺、小国まで行ったもんで急に懐しくなつてよ、辰ンとこサ訪ねてみたのよ。そ

したらよ、何だか知んねえけど多勢集って酒呑んでんのよ。多分、獺師仲間だべ。

俺、入口ンとこで、おう夜這いの辰はいつか(いるか)と怒鳴ったら、若エ奴がとび出してきてよ、兄貴ンこと夜這いだなんて抜かしやがって……といきなりぶん殴ってくるのよ。俺も頼にさわって、何だ！ 夜這いに『夜這い』と云ったってよかんベシタ、と取っ組んでツとよ、辰が出てきて若エ奴の襟がみ掴んで引摺り倒し、木村さんサ手を出す奴あ俺が承知しねえ——と怒鳴ったッけ、奴もいいとこあっさ。それから上げられて吞ませられて、とう／＼泊っちゃまったが……いやいや、奴もあの辺ではまんず大ボスというところだな」

木村はそんなことを話した。

北海道から郷里の米沢に戻ってからも木村は辰次を友人の一人として、というより出入りの衆としていろいろ面倒を見てやっているらしかった。そこで辰次も恩を感じて、戦時中から戦後の食糧不足の折には山の獲物や山菜などをよく運んでくれたそうぞうで

「あいつも武士だ。ちゃんと仁義は心得てンのよ」

と木村は語っていた。

その木村に辰次を紹介したのはもともとは僕だったし、辰次と僕との出会いに至ってはまた奇妙なものだった。

昭和八、九年の頃であった。山形市内から正面に見える雁戸山かんとの尾根に白く雪が訪れていたから晩秋か初冬であつたらう。街はもう冷え冷えとした夜気に包まれていた。

山形市の目抜き通りにある旭座という劇場に「東京レビュー 桜正夫一座」というのが掛つた。レビ

ユーあり、劍劇あり、手品あり、曲芸ありといった泥臭いドサ廻りの一座だったが、それでも座員は五十名近くもあってこの辺に来る劇団の中では豪華な方だった。

都会的な刺戟の少ないままにこんな時は高校生たちも街の人々に混って多勢見物に出かけた。興行は三日間に亘ってうたれていた。僕は最初の二日は、あんなもの見たってつまらないと寮の部屋で寝転んで、寮生たちがガラガラと朴歯の下駄を響かせて出かけてゆくのを見送っていた。三日目は土曜日だった。僕は酒が呑みたくなって仲の良い友達の下、三を誘った。

が、彼らはいずれも

「レビユー見にゆくよ」

と、誘いに乗らなかつた。

一人呑むのもわびしくて僕は彼らにつき合つた。その代りレビユーがはねたら一杯やるんだぞ、と約束した。

レビユーが終つて僕は藤村、篠塚という二人の寮生と街角にある居酒屋に入った。

レビユーの話を肴に暫く呑んでいると藤村が、眼顔で話題を変えろと注意した。二人連れの客が入ってきたからだつた。

ふり返つて見るとその一人はいましたが舞台で見た座長の桜正夫に違いなかつた。舞台で見たよりは少し老けて、でっぷり肥っていた。五十に近かつたのかも知れない。鬢はかなり白かつた。

二人は相当地酔っていて、大声で、酒をどンドン持つてこい、と注文した。

そのあたり構わぬものの云い方が僕の気持にごつんと響いた。フン、たかがドサ廻りの座長の癖